

女院落飾（大野恵造）

女院にょいん 大原おはらに 栖すみ

経きょうを 誦ずして 寂光じやくこうに 親したしむ

幽鬼ゆうき 時ときに 来きたつて 発はつす

地水ちすい 火風かふうの 嘆たん

玉欄ぎよくらん 亦また 潰ついえ 去さつて

蘭麝らんじゃ 已すでに 薰くんぜず

おもえらく 人生じんせいは 是これ

權花きんか 一朝いちちようの 夢ゆめ なりと

女院栖大原 誦経親寂光

幽鬼時来発 地水火風嘆

玉欄亦潰去 蘭麝已不薰

以為人生是 權花一朝夢

解説 建礼門院が、戦いに敗れた平家の人々の魂を慰め、人生の儂さを詠つた詩。

語釈 ※落飾Ⅱ髪を剃りおとして仏門にはいること。※女院Ⅱ建礼門院・高倉天皇の中宮。清盛の子・安德帝の母。※大原Ⅱ京都市左京区北東部にある地名。比叡山の北西麓、高野川上流部に位置する。※寂光Ⅱ静寂。寂静のほたるきを光にたとえたもの。※幽鬼Ⅱ平家の人々の霊魂。幽霊。亡霊。※地水火風Ⅱ体を構成している四元素。地は堅さ、水は湿りけ、火は熱さ、風は動きを本質とする。この地上にある一切のものは、こうして何もかもが、やがては無に帰してしまふであろうというのである。※嘆Ⅱなげく。ひどく悲しく思う。※玉欄Ⅱ白木連の漢名。※潰Ⅱつぶれる。※蘭麝Ⅱ女性の袖や衣にたきしめた芳香。※權花Ⅱムクゲ（アオイ科フヨウ属の落葉樹）の花。朝に開いて夕方にはしぼむところから、はかない栄華のたとえにされる。

通釈 建礼門院は大原に住み、平家の人々の霊を慰めるため経を詠む毎日を通ぐす。時には幽鬼が来て、地水火風を嘆く。玉欄も潰え去つて、芳香も、もう薫らない。人生というのは永く続かず儂いものだ。